

然』の2冊を世に問うことになるのである。

明石高校では主として化学を担当され、永く野球部の顧問として休日のない生活が続いた。学年主任に選ばれ、きびしい勤務になってしばらくして、体調が思わしくない状態が続いた。外地でマラリアにかかり、その薬害と思われる障害が激しくなって、休職されていた。平成7年6月が十三回忌であった。

昭和39年から平畑が会計のお手伝いを始め、ご指導をうけながら担当してきた。昭和42年ころ、県庁の会計担当者の強い指導が3年間続いた。渋谷方式に新しい方式を加えて、平畑、上岡先生、西田先生と会計部が引き継がれ、渋谷先生の確立された気風が今も続いているのである。

昭和30年代、40年代の総会のときには、室井、渋谷、当津の三先生の顔があり、会運営のスムーズな流れが毎年みられたのも懐かしい思い出になっている。

「左右性の謎」(『兵庫生物』2巻3号)の先生の論文は、現在にもそのまま展開できる議論であり、先生のお人柄がしのばれるものである。

(ひらはた まさゆき：会長)

### 猪股凉一先生の思い出

西本 裕

先生とは何度もハバチの採集に同行させていただきました。八ヶ岳の西側、入笠山に着いて荷物をほどくのもどかしく捕虫網と毒ビンを持って飛び出して行かれました。先生の採集スタイルは決まっています、歩くときはいつも道の左側から見て行かれました。その速度は本当にゆっくりで、植物の葉を食べているハバチの幼虫の食痕を見つけながら葉を一枚一枚裏返して、めざす幼虫を見つけるとリュックをおろして、携帯用のプラスチックシャーレの中に幼虫と食草を入れ、リュックの奥にしまわれるのでした。

先生の専門はハバチのうちでも難解な *Pachyprotasis* 属の生態と分類です。幼虫を採集して飼育・羽化させて、その生活史を一つ一つ解明してゆく非常に根気のいる仕事でした。30代の頃の先生は、夜は定時制課程の教師を、昼は兵庫県立農科大学(現神戸大学農学部)でハバチの研究を、長期の休みとなればリュックをかたいで採集の毎日、ご家族のご苦勞が忍ばれる大変な時期でした。

研究を続けること20年余り、「A Revision of the Genus *Pachyprotasis* Hartig of Japan (Hymenoptera, Tenthredinidae)」(大阪府立大学農学博士)という学位論文を提出されました。その内容は次のようでした。当時、日本に産する *Pachyprotasis* 属ハバチは、多くとも20種と考えられていたが、生態特に幼虫

の食性並びに成虫の産卵習性の調査によって、69種に分類できること、及びこれらが形態的に16の種群に分けられることでした。なお69種中52種は新種でした。因みに全世界におけるこの属のハバチは、これらの52種を含めて112種知られたこととなります。1987年には世界で初めてミツガシワハバチという幼虫が水の上を歩くことを見つけ新聞紙上で大きなニュースになりました。先生はハバチの研究だけでなく、サツキの盆栽、日本酒、俳句と大変趣味が広く人生を楽しんでおられました。今年(1995年)1月17日、兵庫県南部地震で自宅が全壊の被害を受けられ、その後の心労で、3月、肺炎のため70歳で急逝されました。ここに慎んで先生のご冥福をお祈りします。(にしもと ゆたか)

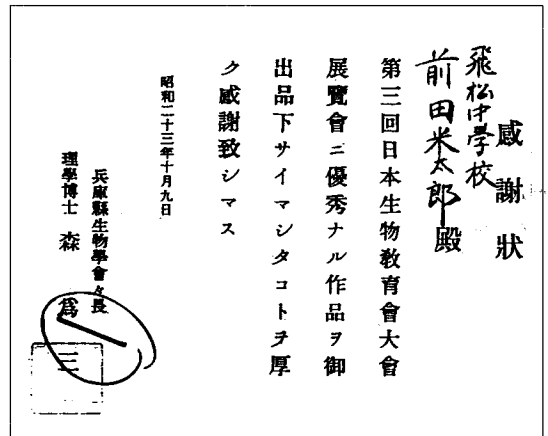
### 白川の化石

前田米太郎

白川峠

昭和14、5年頃から戦後にかけて、白川の化石集めに熱中したことがある。その頃は板宿からの市バスは、車道が終点で、ここから坂道をのぼって白川峠へ行く。峠の手前左側に小さな池があり、池のそばに凝灰岩を粉砕して磨き砂をつくっている小さな工場があった。池を過ぎると右に回って峠になるが、峠を登りつめた所に軒、峠の茶店といえそうな家があった。峠の付近は、この二つの家屋以外は雑木の林ばかりの淋しいところであった。

磨き砂をつくっている家の付近は、凝灰岩層の小山で、つるはしを割れ目に打ちこんで岩を崩していた。ガサッと大きく崩れると、時には1m四方もあるシュロの葉の化石がでてくる。「すみません。化石を採らせて下さい」と挨拶して仕事場に入っていくと、化石なんか採りに来る人もいない頃だから、迷惑がらずに採らせてくれた。



化石標本を生物教育会に出品して戴いたもの